

宮廷恋愛劇としての『エステル』

浅谷真弓

はじめに

ドービニャックは『演劇作法』第2部第1章「筋について」で、デュ・リエの『エステル』を指して、「さまざまな事件に飾られ、激しい情熱によって強力な、まことに巧みに構成された」作品であると述べて、称賛している⁽¹⁾。「筋について」が物語の選択に関して、最も重要な要素と考えるのが、事件の展開の巧みさと「情念の台詞」であるから、このような評価は相当に高いものと言えよう。しかし、一見手放しと見える評価を受ける作品にまったく欠陥がないわけではない。ドービニャックは章を終えるにあたって、作品の伝える「情念」が観客の習俗習慣、もしくはさらに単純に言えば、嗜好に合致しない場合、せつかくのその情念は理解されず、結局効果を生まないのだと結論付ける。18世紀に「趣味」の問題として再提起される事になる「筋の相応しさ」は事件そのものの性質と同様、そこに現れる登場人物の考え方が観客の感受性に訴えられるものかどうかにかかっている。『エステル』はそのような意味においては決して成功作でなかった。『演劇作法』の著者は、ルーアンとパリの評価が異なる原因を「きわめてユダヤ的な作品」であったためと言う⁽²⁾。だが、それだけではないだろう。他方にラシーヌの『エステル』を持つ我々は宗教劇としての一応の完成形を知る事ができる。時の経過を考えに入れても、物語の「ユダヤ的な」性質だけがことさら先行作品のパリにおける成功を阻害したとは思えない。原因はやはり別のところにあるのではないか。以下では、宗教劇としての評価を離れて、もっぱら「嗜好」の側から「エステル」の顛末を追ってみよう。

1. 後宮の乙女

ラシーヌの『エステル』との違いについては多くの研究がなされているので、無駄な繰り返しは避けたいが、最大の相違点はラシーヌのエステルが幕開けの時点ですでにベルシャ王妃の立場にある事だろう。夫である王は、許可なく目の前に現れる者を一瞥で処刑できる典型的なアジアの専制君主、アシュエリユス（クセルクセス）である⁽³⁾。デュ・リエのエステルは、お目通りは許されているがまだ王妃になっていない、後宮の寵姫たちの一人に過ぎない。こちらの王には名前がなく、正式な王妃がいる。王妃にはヴァステイという名が与えられ、強烈な個性を発揮する。そして、この王妃を利用して、自分の恋を成就させ、政敵を追い落とそうとする男が現れる。主君が恋するエステルに横恋慕し、奪うために暗躍する王の寵臣、アマンである。彼の大胆で巧妙な行動は、主人公のエステルが画策するユダヤ人民救済のための健気な「運動」など、まるで色を失う勢いを持っている。優れた政治的バランス感覚を備え、王妃の心情に通じた宮廷人のアマンが、王の寵愛を受

ける女性とはいえ、身分不詳の若い女奴隷になぜ惹かれるのか。政敵マルドシェの、この奴隷女に対する後ろ盾が征服欲を掻き立てるのだろうか。どうもそう単純でないようだ。実際、エステルの台詞を読んだだけでは、一大帝国の専制君主を動かし、有能な若き政治家を惑わせるほどの彼女の魅力は理解できない。伯父の命令に従い、自ら望みながらも、王妃の座に恐れをなすエステルが舞台上で発する最初の台詞は、宮廷生活にお馴染みの自尊心と野心に徹底的に反する、次のようなものだ⁽⁴⁾。

En vain cette grandeur, cette source d'allarmes
 Se presente à mes yeux avecques tous ses charmes;
 Quelque tranquillité qui suivre mes travaux,
 Plus elle offre de biens, & plus je crains de maux,
 Comme cette grandeur est toujours infidelle,
 Je ne vay qu'en tremblant au throsne où l'on m'appelle,
 Et je ne croy monter sur un siege si beau
 Que pour choir de plus haut dans l'horreur du tombeau. (1-1, p.5)

純粋に王を愛するのであれば、恋は現状では「身に余る」光栄を忘れさせるかもしれない。しかし、エステルはこの恋がもう一つの役割を担っている事を誰よりよく知っている。民族全体の運命を握る使命が重大で、失敗すれば命が危ういからではない。自分の二心に対する恐れが玉座を死地に変えるのだ。愛を裏切り、恋を偽り、自らの思うように人を操る行為は自分を含めた全世界に対する挑戦であり、疑いの源なのである。世界は「何もご存知でない王」が見ているのとは違う真実を持っている。「わたし」こそがその第一の存在になろうとしている。奴隷となって後宮に入ったとき、捨てたはずの「わたし」はまだ手元にあった。玉座に昇れば、さらに引き離されるだろう。エステルは名を呼ぶのさえ無用な絶対権力の中樞に近づくために、決定的に「わたし」を失う。今度こそ、本当の人形になる必要がある。そして、以前のように彼女が「誰かが人を恋する気持ち」をまったく理解しなければ、民族の願いは彼女の願いに完全に一致し、自らを空しくして人形となる恐れも惨めさも知らなかったであろう。むしろ彼女の内実は民族の願いに満たされ、願いの成就こそが彼女の自己実現であった。堂々と玉座に昇り、私心ではない、民族の大義のために王の政策を変える力を得れば良かった。彼女の意志は民族の意志であり、「義務と心情の相克」に悩む理由はなかった。エステルが男性であれば、この相克は更に激しく、はっきりと描かれたにちがいない。だが、彼女は自分の恋の対象すら見定められない、未熟な少女である。皮肉な事に、強烈な欲望が絡み合い、権謀術数渦巻く後宮にあって、エステルの存在価値はこのような脆弱さ、未熟さによって高まる。ある研究者はエステルとアマンの関係を光と闇に喩え、作品は光が闇に打ち勝つ過程を描くとしているが⁽⁵⁾、欲望の暗黒面に支配され、善悪が反転したこの世界では、エステルの私心のなさはネガティブにしか表現できない。最初からエステルは「～ではない」者としてしか生きられないのであ

る。いかに聞き役が説得に努めようと、この生き方は変えられない。また、変えてしまえば、彼女の後宮での存在価値はなくなる。侍女タマールは少女にわかりやすく大義を説く。

Comme toutes mers ne sont pas orageuses,
Toutes grandeurs aussi ne sont pas perilleuses.
Quand le Ciel relevant un grand throsne abattu
Veut en faire le prix d'une illustre Vertu,
Il sçait bien separer de la grandeur mortelle
Cette instabilité qui luy fut naturelle. (1-1.p.6)

しかし、ユダヤの王女は欲望のあてどなさをもとに大人の論理、大義に反論する。王女は政治にも恋にも無知、無力であり、無策であることを表明する。

Un grand Roy me cherit ; un Monarque qui m'aime
M'offre avec son Amour la part d'un Diadème,
Et peut-estre qu'une autre avecque cet honneur
Croitroit avoir atteint le faist du bon-heur;
Mais si ce mesme Roy qui me rend Souveraine,
Vient de repudier une puissante Reine,
Une Reine autrefois son ame, & ses desirs
Dont la possession faisoit tous ses plaisirs,
Dont les ayeux regnoient, & dont le Pere regne,
Foible comme je suis que faut-il que je craigne?
Doy-je establir ma force en l'amitié d'un Roy
Qui rejette une Reine, & luy manque de foy?
Doy-je me confier aux biens qu'il me presente,
Et qui n'ont pour appuy qu'une amour inconstante ? (ibid.)

欲望の世界に生きる王は、エステルが無知を純粹さに、無力を野心の欠如に、王だけを頼りにする態度を貞節に読み替えるであろう。タマールは「結局王はあなたを愛している」と言って、話を打ち切ろうとするが、まだ愛の内実に触れていないエステルにとって、この言葉は意味をなさない。ここであえなくタマールは議論に敗退する。次いで、大義のために姪を利用し、王を動かそうとするマルドシェが来て、タマールに替わり、議論を続行する。愛が何かを知らない乙女に、最初から愛の効用を説く無駄は省略される。マルドシェは人の心情を読み、緻密に計算し、政策実現に結び付ける生来の政治家なのである。

Jugera-on tousjours vous voyant comme en deuil,
Qu'au lieu d'une couronne on vous donne un cercueil?
Donnez par vostre joye une éclattante marque
Que vous sçavez priser les faveurs d'un Monarque;
C'est offenser le Ciel & violer ses Lois
Que d'estre indifferente aux faveurs des grands Roys,
Puisque c'est par des mains si nobles & si cheres
Que le Ciel nous conduit aux fortunes prosperes. (1-2. p.7)

マルドシェが、人智を超えた天の意志を根拠に使って、実際には自分の願望に過ぎないエステルの行動を正当化するのに対し、エステルは最大の武器である「自信のなさ」をもって反論する。民族の大義と少女の恋心はどこまでもかみ合わない。かみ合わないことによって、議論は一旦痛み分けの様相を呈する。

C'est dans nostre fortune une espece d'appuy
Que de craindre tousjours ce qui fait choir autruy. (ibid.)

しかし、マルドシェは一枚も二枚も上手である。天の意志を口にした舌の根も乾かぬうちに、前王妃が玉座を追われる理由を具体的に考え、前車の轍を踏まぬようにとまで言う。

Je sçay bien que le sort d'une Reine chasée
Peut avecques raison troubler vostre pensée,
Mais en jettant les yeux su son adversité,
Regardez les raisons de sa calamité.
Vous connoissez l'escueil qui causa son naufrage,
Tachez de l'éviter dans mesme voyage,
C'est dans nostre fortune une espece d'appuy
Que d'avoir reconnu ce qui perdit autruy. (1-2. pp.7-8)

以下でマルドシェは前王妃が王の寵愛を失った原因を細々と挙げ、エステルにはそれとは正反対の行動をとれば良いと教える。敵の失点を利用するところではない。マルドシェにとってこの戦いは勝利が目に見えている。少なくとも、エステルにはそう信じさせなければならない。後宮の悪弊に染まらず、美德を保ち、高貴であることが最終的には王に対する力を維持してくれるはずだ。マルドシェもまた「～ではない者」としてのエステルの力の源を良く心得ているのである。

Si vous devez tomber & perdre la puissance,
Tombez comme victime avec vostre innocence.
Enfin puisque le Ciel ne fait rien vainement,
Joignez à son vouloir vostre consentement. (ibid.)

エステルの自信の欠如はすばやく純粹無垢へ変換された。頼みとした武器が自分自身に向けられては、もはや抵抗の余地はない。エステルの敗北宣言は潔く聞こえる。

Je veux tout ce qu'il veut. Enfin quoy qu'il ordonne,
Je verray d'un mesme oeil les fers ou la couronne. (ibid.)

マルドシェとユダヤ民族と天の意志には従うと言う。しかし、それは単に人形になることではない。「同じ目で鎖と王冠を見る」エステルは民族の救済者であると同時に恋する少女でもある、二重の存在になったのだ。エステルの純粹無垢はこうして保存される。彼女が出自を隠すのは、あくまでも王がユダヤ人を嫌っていて、自分がユダヤ人と知れば、嫌われるからである。決して政策を変えさせるためではない。タマールに言わせれば、それは逆で、エステルを愛する王は必ずやユダヤ人を救ってくれるだろう（同幕、同場、9-10頁参照）。エステルが王を愛すれば愛するほど、彼女の純粹さは堅固になり、政治的に益々有用になるとは皮肉である。以降のエステルの行動はしばしば対立する二重の意味を持ち、その事が彼女の役割を、結果として筋の展開を解り難くしていると言えよう。対照的に、後宮の悪弊を一身に背負った前王妃は解り易い人物である。

2. 王妃と寵臣

前王妃ヴァステイは見ようによっては誇り高い女性である。登場すると、即座に王の寵臣の掌を返したような態度に鋭く迫り、詰問する。彼女は身の程知らずの愚か者などではなく、寵臣の豹変ぶりを通して、過去と現在を引き比べ、事実を把握し、自分のとるべき行動を理解する。

Donques Haman me fuit, donc Haman m'abandonne !
Haman qui me plaçoi au nombre de ses Dieux
Tandis que ma Couronne éclattoit à ses yeux !
Haman qui m'adora tandis que l'apparence,
Tandis que ma grandeur flatta son esperance !
Ayant accoustumé durant nostre bon-heur
De lever tes regards pour me voir dans l'honneur,
Trouves-tu difficile en ce destin estrange
D'abaisser tes regards pour me voir dans la fange ? (2-1. p.18)

アマンの逃げ口上にヴァステイの激怒は収まらず、

On ne s'expose pas

Lors que pour s'alléger on cherche le trespas.
Moy, moy je pourrais voir une indigne rivale
Monter dessus mes pas au rang d'où je devale !
Je suis Reine, mourrons pour un titre si beau ;
Pour les Rois, pour les Rois le trône ou le tombeau.
Il n'est point de milieu que les Rois puissent prendre
Quand le sort irrité les contraint de descendre ;
Le trône ou le tombeau, tout le reste est honteux. (2-1. p.19)

恋敵となった女が自分に対してあまりに不釣り合いであり、そもそも王者の誇りとは何かを語る。今置かれている立場は、恋する女（私人）としても、政治的な存在（公人）としても甚だ本意である。（これらの台詞は本来、ユダヤの王女であるエステルのものであっても良い。）王に次ぐ順位にあった自分を否定する事はこれまでの枠組みを根本的に変える事なのだ。前幕でマルドシェは王妃がいかに自信に満ち、並外れた美貌の持ち主であったかを証言している。

Si l'orgueil la fit choir d'une place adorée,
Que la soumission vous la rende assurée,
Et tâchez de garder par vostre humilité
Ce qu'une autre a perdu par sa seule fierté.
Une beauté superbe est peu de temps charmante,
Mais tant qu'elle est modeste elle est toujours puissante,
C'est par là qu'elle rend ses attraits plus constans,
C'est par là que sans peine elle regne long-temps. (1-2. p.8)

この自信は彼女の行動が宮廷社会で完全に是認され、彼女の意志こそが宮廷の意志であり、紛れもなく王の意向を踏まえたものであった事に発する。それが彼女にとっては寝耳に水の変革によって覆る。アマンの現実的な忠告はもはや効果がない。

Moy ! j'en suis incapable,

Pour craindre & pour trembler de quoy suis-je coupable ?
Un Roy capricieux, bizarre en ses projets,
Donne de grands festins aux peuples ses sujets ; (ibid.)

ヴァステイの今までの生き方、人格を完全に否定する価値観を体現した恋敵の姿はよく見えている。王の選択に抗議し、抵抗しようものなら、それは私人としての恋愛問題を越え、反逆罪に発展する。王に対してもさることながら、身分卑しき「民衆の娘」に対して、前王妃の不満は爆発する。

J'ay satisfait Haman à son lâche desir,
Puisqu'il ne me faisoit une Loy si cruelle
Qu'afin de m'obliger de paraistre rebelle,
Qu'afin que mon refus qu'il avoit souhaité
Donnast quelque couleur à sa brutalité.
(.....)
Affecte le plaisir & non pas les personnes.
Une fille du peuple, & vous l'avez souffert,
Une fille du peuple, ha ! ce penser me perd.
Ce penser me remplit de fureurs & de rages. (2-1.p.20)

だが、作者はこの対照的な二人に同じような台詞で権力の運命を語らせている。どちらにしろ、命を賭けた戦いである事に変わりはない。

ESTHER

Et je ne croy monter sur un siege si beau
Que pour choir de plus haut dans l'horreur du tombeau. (1-1.p.5)

VASTHI

Le trône ou le tombeau, tout le reste est honteux. (2-1.p.19)

マルドシェの台詞はむしろ言わずもがなである。

MARDOCHEE

Jugera-on tousjours vous voyant comme en deuil,
Qu'au lieu d'une couronne on vous donne un cercueil ? (1-2.p.7)

やがて、それまで一度も名を呼ばなかった敵の名を呼び、前王妃は宣戦布告する。

J'arme aussi contre Esther ce que j'ay de pouvoir.
Comme c'est aujourd'huy qu'on la doit recevoir,
Je viens, je viens moy-mesme à la mort toute preste
Pour differer au moins cette funeste feste. (2-1. p.21)

Pourrais-tu voir enfin dans un throsne aduable
Une esclave de Perse & vile & méprisable ?
Pourrais-tu sans murmure obeïr à sa voix
Toy qui fus en estat de luy donner des Loix ? (ibid.)

これを聞いた寵臣はすかさず次のように述べて、前王妃との利害の一致を認める。

Non, non, Madame, non, il faudra que j'expire
Si le bon-heur d'Ester le conduit à l'Empire.
Ha S'il luy faut un trosne, il me faut un tombeau,
Et la grandeur d'Esther est enfin mon bourreau. (ibid.)

ヴァステイがうまく王を翻意させれば、アマンは王の意に背かずエステルを手に入れられる。それに乗じて、目障りなエステルの後見人、マルドシェを追い落とす。一挙両得以上の成果が期待できるではないか。アマンは前王妃の王に対する影響力がどのようなものか、間近で見てきた。しかし、王妃の首を挿げ替えさせるに至ったエステルへの力に対する力はそれを上回っているはずだ。勿論、自らを絶望させるエステルの力も。これに気づかぬアマンではない。だから彼の期待はおおよそ政治家らしくない、淡い期待なのである。前王妃には冷静になって反逆罪の罪を引き寄せないようにと忠告した彼が自分の命運を決する戦いで戦略を見誤った瞬間である。奴隷に恋する王も狂気なら、寵臣もまた狂気に陥っていると言わねばならない。純真無垢な後宮の乙女が前王妃には得体の知れない魔女に見えたとして、不思議ではない。激怒し、いささか前時代的な、繰り返しの多い古めかしい台詞で王の変心を糾弾するヴァステイこそがただ一人、宮廷の常識を示しているのである。彼女の訴えは、表現の激越さとは裏腹に、至極もつともであった。時節を弁えない愚かさを反省して、自ら王妃の座を降りれば良かったのだろうか。彼女の台詞は敗者というにはあまりに堂々としている。

Belle & charmante Esther, épargnez-vous la peine,
A ma confusion de deffendre une Reyne;
Ne me secourez point dans un sort si douteux,
Le secour d'une esclave est un secour honteux ; (3-3. p.40)

最後まで自分と奴隷を同等の敵とする事を拒み、まるで直接の敵はエステルではなく、別にいたように、余裕綽々、警告を発する。

Mais craignez ses faveurs ainsi que des menaces. (ibid. p.41)

C'est se mettre en peril que de trop s'y fier. (ibid. p.42)

Esperez néanmoins un sort plus salutaire,

L'amour estant pour vous, rien ne vous est contraire,

Esperez,esperez un bel événement,

Puis qu'en ce grand procez le juge est vostre Amant. (ibid.)

ヴァステイにとっての真の敵は名無しの王であり、新たに王妃となるエステルへの敵も恐らく、王を通してこの世の運命を操る者であろう。これに抗う寵臣の敗北は自明の理だ。作者が前王妃に言わせる台詞はそのまま不吉な予言に聞こえる。恋の成就と政敵追い落としの二兎を追ったアマンは結局どちらにも失敗するのである。しかも王に対する裏切りを告発するのは最愛のエステルだった。

LE ROY

(.....) Parlez, parlez enfin, montrez-moi cet infame.

ESTHER

Sire, c'est Haman.

LE ROY

Vous Haman?

HAMAN

Moy Madame ? (5-5. p.77.)

あるギリシア人が携えていた手紙が動かぬ証拠である。王はエステルから手紙を受け取って、その場で読み、「アマンは我が敵たちに手紙を書き、マケドニア人らに裏切りを命じたのだ」(同、78頁)と了解する。その後のエステルへの訴えは、前王妃に対する王の寛恕を求めた場面を知らなければ、まったく奇妙だ。ユダヤの王女である出自を明らかにしつつ、自ら告発した人物の命乞いをするのである。(同、79頁～81頁)王は、敵の命を惜しむエステルの高潔さを称えながら、アマンを逮捕させる。エステルへのメッセージは誤って伝わったのではない。むしろ王は恋敵としてのアマンの存在を認め、抹殺する事にしたのだ。政治的な裏切りが問題であれば、前王妃の例に倣い、追放されて終わりだろう。恋を争うはずだったヴァステイは政治的に葬られ、政治の主導権を争うはずだったアマンは王の恋敵となって命を落とす。本来対角線上に位置すべき対抗人物との関係にこのような「ねじれ」が生じるのは前節で述べた主人公エステルへの二重存在性に原因がある。宮廷においては「～ではない」存在である無垢のエステルが、宮廷につきものの陰謀の主犯を助けようとするれば、王はメッセージを反転させ、逆の方向に読み替えるのである。

LE ROY

(.....) Vous gardes sasissez ce butin des Enfers,
Et que le seule mort l'arrache de nos fers.

ESTHER

Ha Sire, en sa faveur écoutez la clemence!

LE ROY

La Clemence est un crime en pareille occurrence,
Et quelque beau laurier qu'on en puisse cueillir,
Pardonner aux méchants, c'est monstrier à faillir.
Mais enfin que les Juifs reprennent leur franchise,
Qu'ils soient plus honnorez que l'on ne les méprise,
Et qu'en faveur d'Esther, on voye en mesme jour
Triompher l'innocence, aussi bien que l'amour. (ibid. p.81.)

この日転換された新たな価値観に基づいて、宮廷は政治的にであれ、もっと個人的な人間関係についてであれ、次々と肅清、整理を行うであろう。そしてルーアンには、幸いな事に、重ねるべき宮廷は身近にない。

おわりに

デュ・リエの『エステル』が初演された1642年には、コルネイユの『シンナ』が上演された。42年から43年のシーズンには同じくコルネイユの『ポリュークト』、ロトルーの『ペリゼール』がある。また、41年には、マドレーヌ・ド・スキュデリーの小説、『イブライム』が上梓されている⁽⁶⁾。いずれの作品にも共通する要素は、異国、古代ローマの宮廷を舞台にした（政治問題としての宗教も含めた）政治と恋愛であろう。しかし、1642年と聞いて最初に思い浮かべるのは、やはり、リシュリューの死去である。強い求心力を持っていた人物の宮廷からの退場は現実の世界では多かれ少なかれ波乱を起こす。フィクションの世界ではどうであろうか。『エステル』は、後宮の乙女が、そのねじれた二重存在によって、恋と使命の軋轢に悩み、宮廷恋愛劇の分限を超えて、パリの観客の「何か」を刺激する部分を持っていたのではないか。これはまったく根拠の無い話ではない。デュ・リエには劇作家としての最初期の作品が「見えざる力」により、上演、出版が延期された経緯がある⁽⁷⁾。『エステル』にはそうした形での圧力は働かなかった。だが、劇場における芳しくない反応こそは、登場人物間のねじれた関係と同様、価値転換に対する「嗜好」の離反を示すのではないかとと思われるのである。

注

- (1) オービニャック師著、戸張智雄訳、『演劇作法』、第2部第1章、「筋について」、58頁、中央大学出版部、1997年。
- (2) 同書、同箇所。
- (3) オディール・デュスッド、伊藤洋監修、エイコス編、『フランス17世紀演劇事典』、ラシーヌ、『エステル』、468-470頁、中央公論新社、2011年。
- (4) DuRyer, *ESTHER*, tragédie, Sommaville, 1644, Ed. par Perry Gethener et Edmund J. Campion, University of Exeter, 1982. 以下引用は綴り、頁数など、すべて前掲、ゲゼナー、カンピオン校訂版による。
- (5) Maria Papapetrou-Miller, *Esther, ou de l'Obscurité à la Lumière*, Littératures Classiques, Pierre Du Ryer dramaturge et traducteur, Société de Littératures Classiques, pp. 277-294. Toulouse, 2001.
- (6) 『フランス17世紀演劇事典』、関連年表、800-803頁。
- (7) この経緯については、デュ・リエの最初期の作品である『アレタフィル』の校訂者による詳細な分析がある。R. Grazia Zadini Lana, Introduction, pp. 9-59. Du Ryer, *ARETAPHILE*, tragi-comédie, Ed. par R. Grazia Zadini Lana. Editions Slatkine, Genève-Paris, 1983.